転法輪堂（釈迦堂）（重文）

西塔の中心本堂。釈迦堂または西塔中堂とも呼ばれる。最澄から直接薫陶をうけた二代目天台座主円澄（えんちょう　771～836）が西塔地区を開き、転法輪堂を建立した。本尊は最澄が東塔北谷の霊木で自ら刻んだ釈迦如来像。内陣の石畳が参拝者の位置よりも低くなっており、本尊が参拝者と同じ高さになるようになっている。これは天台様式の仏堂の特徴であり、東塔の根本中堂と同じである。

一時期荒廃するが、良源（りょうげん　９１２～９８５）により復興整備される。天下統一を目指した織田信長（おだのぶなが　１５３４～１５８２）による元亀二年（1571）の焼き討ちで焼失した後、１５９５年に詮舜（せんしゅん　１５４０～１６００）が信長の後を受けて天下統一を果たした豊臣秀吉（とよとみひでよし　１５３７～１５９８）に再興を願い出、三井寺の弥勒堂がこの地に移築された。建物は貞和三年（１３４７）に造られたもので、比叡山に現存する仏堂では最古のものとなっている。